逸脱行動に対する感情評価の検討

—災害時の創発規範—

OWiwattanapantuwong, Juthatip 阿部恒之

(東北大学大学院文学研究科)

Key words: 東日本大震災, 怒り, 恥

目 的

災害時に、パニック・略奪などの逸脱行動が多発するという社会通念は、パニック神話 (Keating, 1982)、災害神話 (Quarantelli, 1994) に過ぎないことが指摘されている。実際、東日本大震災では、これらの逸脱行動が問題視されることはなかった。しかし、盗電による携帯電話の充電など、平時においては許されない緊急避難的な行動があったことが指摘されている (阿部, 2013)。このような、災害時の「逸脱行動」は、災害によって伝統的・制度的構造が大規模に破壊し、無効化された結果と考えられてきたが (Park & Burgess, 1921), Turner & Killian (1972) は、伝統的・制度的社会規範が機能しない状況で、その非常事態にふさわしい社会規範が立ち上がり・共有された結果であるとみなした。この非常時の規範は、創発規範 (emergent norm) と言う。

平時の社会規範との比較による災害時の社会規範 (創発規範) の特徴、実際に被災した地域とそうでない地域の規範観の差異、社会規範に及ぼす感情の効果について検討する。

方 法

■参加者： 東日本大震災被災地域 (被災地：岩手、宮城、福島) 1,916 名、東日本大震災の時に被災せず、歴史的にも災害が少ない地域 (非被災地：愛知、京都、滋賀) 1,920 名、合計 3,836 名 (男性 1,916 名・女性 1,920 名。年齢 20~59 歳、平均 39.7 歳・SD10.9)。

■質問紙： 基本特性 (性別・年齢)。9 つの逸脱行動 (表 2 参照) に対する非許容性、それを他者が行った場合の怒り、それを自らが行った場合の恥について、平時と災害時それぞれを仮定した評価を行った (0~5 の 6 件法)。災害時の状況設定では、東日本大震災と同様に、建物は壊れ、大規模な人的被害が発生し、電気・ガス・水道が止まり、食料品も不足している状況を、イメージ写真と文章で提示した。

表 1 各逸脱行動に対する非許容性の平均値。

	被災地		非被災地	
	平時	災害時	平時	災害時
割り込み	4.2	4.1	4.1	4.0
ゴミの不法投棄	4.1	3.6	4.0	3.4
自動販売機窃盗	4.0	3.5	3.9	3.3
落し物私有	3.5	3.4	3.4	3.3
路上駐車	3.2	2.9	3.2	2.9
買い占め	3.2	3.3	3.0	3.2
公共地での焚火	3.1	2.4	3.0	2.4
地域活動協力拒否	2.5	2.9	2.5	2.9
公園の柿の実をとる	2.3	2.2	2.4	2.2

■手続き： 東北大学による倫理委員会の認可を得て、インターネット調査を実施。調査期間は 2014 年 2 月 28 日から 3 月 6 日まで。回答者への報酬は約 500 円の物品と交換できる調査会社のクレジットポイント。

結 果

非許容性評価について、逸脱行動 (9 種)・状況 (平時・災害時) を参加者内要因、地域 (被災地・非被災地) を参加者間要因とする 3 要因分散分析を行った (各セルの平均値を表 1 に示した)。その結果、逸脱行動 ($F(8, 30672)=1915.71$, $p<.001$)、状況 ($F(1, 3834)=239.10$, $p<.001$)、地域 ($F(1, 3834)=9.65$, $p<.01$) の主効果が有意であり、逸脱行動と状況 ($F(8, 30672)=408.47$, $p<.001$)、逸脱行動と地域 ($F(8, 30672)=7.61$, $p<.001$) の交互作用が有意であった。買い占めと地域活動協力拒否は災害時に非許容的になるが、その他は災害時に許容的であった。割り込み・ゴミの不法投棄・自動販売機窃盗・落し物私有・買い占めについては被災地のほうが非被災地より非許容的であった。

逸脱行動に対する非許容性に、他者への怒りと自らの恥評価が及ぼす効果を階層的重回帰分析で検討した。従属変数には非許容性の総合得点の平時-被災時を用い、第 1 ステップの独立変数として性別・地域を、第 2 ステップの独立変数として怒り・恥それぞれの総合得点の平時-被災時を投入した。この結果を表 2 に示す。逸脱行動への非許容性は怒り ($\beta=.65$) と恥 ($\beta=.13$) の影響を受けていた。

表 2 非許容性変化に関する階層的重回帰分析の結果。

ステップ	説明要因	β	R^2	ΔR^2	F
1	性別	.03	.00		1.55
	地域	.01			
2	性別	.00	.53	.53	1086.97***
	地域	.01			
	怒り	.65***			
	恥	.13***			

考 察

9 つの逸脱行動のうち、7 つは災害時に許容的になっていたが、買い占めと地域活動協力拒否は、逆に非許容的になっていた。災害時には、緊急避難的行動を許容し合うこと、自己中心的な行動には厳しくなることを示す結果であると思われる。創発規範は、非常時にふさわしい規範として立ち上がるという主張を、数量的に確認することができた。

東日本大震災の被害を実際に経験した地域は、そうでない地域よりも逸脱行動に非許容的で厳しい態度を示していた。災害文化 (Moore, 1964) の形成は、このような逸脱行動に対する態度の変容を伴うものかもしれない。

災害時の逸脱行動への許容性には、その行動に対する怒り (他者行動) や恥 (自分の行動) が影響していた。創発規範の成立には、感情評価が影響していると考えられる。特に他者の行動への怒りの影響は強く、災害時の創発規範成立における重要な要因となっていることがうかがえる。

(Juthatip WIWATTANAPANTUWONG, Tsuneyuki ABE)